西俊輔の「毎日楽しく」

Vol.28　2007年12月号

先日、友人の結婚式に出席してきました。同年代の友人ですが、私たちの年齢を考えると今回の結婚はかなり遅いほうで、実際、私の妻は友人の結婚式に出るのが何年ぶりか思い出せないと言ってるほどでした。

結婚というと、いうまでもなく他人同士が一緒になることですが、結婚とか家族の問題を考えるとき、私はいつも「血のつながり」と「心のつながり」ということを考えてしまいます。他人との結びつきに比べて親子・兄弟の結びつきが強いことを「血は水より濃い」などと言いますが、本当にそうなのでしょうか？

親や兄弟というのは、ふつう、生まれたときから一緒に暮らしています。結婚するまで親・兄弟と一緒に暮らすこともあるでしょうし、最近は少なくなってきたようですが、結婚してからも親と一緒に暮らすこともあります。あるいは、中学や高校ぐらいから親・兄弟と離れて暮らすこともあるでしょう。いずれにしても、ほとんどの人は人間としての人格を形成する重要な時期を、親・兄弟との結びつきが強い状態で生活していると思います。こういう状況で親・兄弟との結びつきを考えるとき、それは「血のつながり」があるからというよりも、すでに「心のつながり」ができあがっているのではないかなと思うのです。おまけに血がつながっているから、遺伝的に似た部分がある人たちです。親近感という点でも、「心のつながり」を強めることでしょう。私は、血のつながった人との結びつきの方が最後は強いということはなくて、結婚相手のような他人同士の間でも、親・兄弟と同じような「心のつながり」をつくることができると思っています。

仮に、みなさんが今のご両親と血のつながりがなくて、ある日突然、「自分たちが本当の親だ」という人が現れたら、みなさん、その人たちを親だと思うことができますか？　私はちょっと厳しいかも。

さて、今年ももう12月です。月日のたつのが年々早くなっているように感じます。今年もみなさまには大変お世話になり、本当にありがとうございました。みなさまにとって、来年もよい年でありますように。